

提 言 書

令和 8 年 3 月

南部町公民館運営審議会

提 言

[暮らしとともにある公民館をめざして]

I.はじめに

二町合併による「南部町」が誕生して20年余が経過した。住民や地域、行政はもとより、各種団体等の知恵や工夫、様々な取り組みによって新しいまちづくりは着実に進展しつつある。その象徴的な取り組みは、地域主権を目指した七つの「地域振興協議会」の設立と言えよう。教育面では、コミュニティ・スクールの導入による新しい学校づくり、青年団の再興は全国に先駆ける取り組みであった。また、図書館の二館体制や「キナルなんぶ」の開設は、生涯学習を支える新たな学びの拠点として一層の機能の充実が期待される。一方、こうした歩みを振り返る中で公民館の姿が薄れつつあることは否めない現状として認識を共にしなければならない。かつては独立館であった町公民館や地区公民館がその姿を変え、他の公共施設と併設あるいは閉館となったことは、残念ではあるが時代の流れとして受け止めなければならない。

私達公民館運営審議会には、こうしたまちづくりの経過や現状とともに今日の情報化の進展や少子高齢化、持続可能な社会の構築等々、時代や社会の流れを見据えた新たな公民館のあり方が問われていると認識している。生涯学習社会の知の拠点である図書館や住民主体の地域振興協議会等本町の特性を存分に活かしつつ、住民一人ひとりの暮らしを支え寄り添う新しい公民館の姿を展望しなければならない。微力ではあるがその歩むべき方向性について5年程度を見通しながら、今取り組まなければならない視点を以下の通り提言としてまとめた。

II.公民館の現状と課題

令和7年度当初より専任公民館長が未配置(教育長兼務)となった。やむを得ない事情によるものと仄聞するが、すみやかな専任化に努められたい。社会教育の最前線に位置する公民館の司令塔が現場に不在の状態では、多岐にわたる様々な問題や課題と果敢に向き合うことは困難と考える。

(1) いきいき生涯学習応援事業

本事業の中核をなす「ことぶき大学(高齢者)」と「ひょうしぎ学級(成人女性)」は思い切った見直しが必要だろう。両者に共通する問題点は参加者の固定化でなかろうか。特に前者は、参加者の減少化・固定化が際立

っており廃止も含めつつ、新たな高齢者教育の切り口を模索すべきだ。後者については、参加される年代層の幅が年々拡大しつつあるようだ。年代により生活課題も異なる訳であり、共通課題・年代ごとの課題を整理し、より主体的な学びに発展していくよう様々工夫したいものである。公民館教室については、公費によって支えられていることをふまえれば、地域づくりやまちづくりに資する(還元)ことを忘れてはならない。併せて、教室に集う仲間の固定化傾向にも心を配りつつ、本町公民館ではカバーし切れていない新たな学びの教室化にも職員は敏感であって欲しい。

(2) はつらつ青少年応援事業

「はんどん学校」や「夏休み教室体験」事業等、小・中学生を対象とする取り組みには創意工夫も見られ一定程度の評価をすべきだろう。但し、参加者が西伯地区に片寄り過ぎてはいないだろうか。移動手段が限られる児童・生徒の特性をふまえれば、開催場所や方法等さらなる創意工夫が求められている。

(3) ときめき文化活動応援事業

「ふれあいチャリティー芸能大会」と「ほっと♥コンサート」は、公民館主催事業から住民による実行委員会方式に移行し今日に至るが、長きにわたって取り組み支えてこられた関係者各位に敬意を表したい。その上で、さらに持続可能な取り組みとするためには、何のために(目的)やっているのか、過度に公民館職員に依存している点はないか(主体性)、マンネリ化の側面はどうか、実行委員の新陳代謝は上手くいっているか等々、しっかりと振り返りをしたいものである。その際、公民館職員や社会教育主事の支援や指導・助言は必須の要件であることを忘れてはならない。

「生涯学習作品展」の評価はなかなか難しいが、適切な展示スペースの確保や展示位置等の振り返り(次年度反映)はできているだろうか。本事業が、学習成果の発表とともに学習意欲の喚起に資するものでなければならぬことは論を待たないが、そのためには展示要望に応えるだけでは充分とは言えない。出品者及び作品に対する敬意と事業目的に沿った多様な配慮を心掛けたい。また、成人の学びの現況を確認する良い機会でもある、新たな地域還元策や公民館教室等への取り組みにもつながれば幸いである。

III.課題解決に向けて

南部町公民館が現在抱える課題について、公民館の役割を考える上での三つのキーワード「集う」・「学ぶ」・「結ぶ」の視点から解決の方向性について考えてみたい。

◎「集う」機能

誰もが気軽に集まれる場所や機会が提供されているか…という点である。まず、気になる点は施設使用料の減免対象活動の曖昧さである。公民館は全ての住民に公平、公正に開放されていなければならないが、現状はどうだろうか。また…稀にはあると思うが、施設が空いているにもかかわらず利用できない仕組みとなっていることも気になる。『誰もが気軽に集まれる…』と言う公民館の大原則を大切にしたい。そもそもキナルなんぶは、老朽化した旧西伯分館の改築を目的に複合施設として建設されていることを忘れてはならない。

次に、若年世代が気軽に集まれる場所になっているのかという大命題である。極めて困難な課題ではあるが、何もしなければ公民館存亡の危機にもつながるのではないか。知識やスキルを学ぶ…というレベルではなくとも、気軽に集まれる場所として積極的に発信していく必要がある。キナルなんぶ多目的ルームや富有まんてんホールは一定程度の防音効果が期待される、若者のダンスや音楽活動を促すことはできないか。また、教育委員会と連携して高校生サークルや青年団活動の拠点化(たまり場)に取り組むことはできないか知恵を絞りたい。そのためには、前述した施設利用上の課題は解決されていなければならないが、いずれにしても10年先20年先を見据えた取り組みを緒に就けなければならない時機でもある。

◎「学ぶ」機能

このことについては後述する「結ぶ」機能とも関連するが、まずは当面の事業について触れたい。「ことぶき大学」については解体的見直しに迫られていると思う。高齢者が抱える諸課題については福祉や医療等様々な分野での支援が充実しつつある。ここでは学びの集団化や仲間づくりの観点から具体的な取り組みを提案してみたい。それは、町老人クラブ連合会あるいは単位老人クラブとの連携による学ぶ機会の提供である。本町における老人クラブ活動は多くの課題に直面していると推察される、両者の連携・融合による新たな高齢者教育の姿を展望していただきたい。「ひょうしぎ学級」の問題点については前述した通りである。年代による生活課題への対応を急ぐのであれば年齢により二つに分割することが考えられる。また、より主体的な学びに発展することを意図するならば、あえて西伯・会見両地区を単位とする学級に再編成し、学びの競い合い…時々合同、そんな仕掛けはどうだろうか。いずれにしても、学習者の満足度を如何にして高めるか…忘れてはいけない基本認識である。公民館教室については前述した通りであるが、貸館業務に留まらず、若年層及び成人層の主体的な

学び創出に汗をかいていただきたい。また、はんどん学校や教室体験事業の先に『文化少年団』のような取り組みはできないか…夢を膨らませたいものである。

◎「結ぶ」機能

このことは、公民館にとって正に時代的要請であると言えよう。生涯学習社会の到来による学びの多様化、市町村合併に伴う施設の統廃合や職員体制の脆弱化等々、公民館存亡の危機に直面しているのではないか。こうした現状を打破し、新しい時代の公民館を展望する時に「結ぶ」機能は極めて重要なツールの一つと考えられる。具体的には、住民主体の地域づくりに取り組む地域振興協議会や二館体制の図書館、さらには社会福祉協議会やスポネットなんぶ、JOCA 南部等々との連携・融合する取り組みの創出が求められている。つまり、それぞれが持つ情報や人材、ネットワークを有機的に結び付け、現状の取り組みをアップデート、もしくは新たに創出するためのエンジンであり「要」となることが公民館に求められているのではないか。地域振興協議会については、上記の観点から2箇所程度の協議会とモデル的な連携に取り組んでみては如何か。図書館との連携については、これまでも実践あるいは意識されて来たと思うがレベルアップしていきたい。図書館を支える図書館応援団「なんぶらりー」を巻き込み、司書の専門性、住民目線、公民館の底力(社会教育のノウハウ)を融合させればその先に何が見えてくるのか…可能性は無限大であり期待したい。

また、新たな学びの場として学校施設の有効活用を積極的に考えてみたい。給食をセットと考えれば楽しさは増す…正に「楽習」となる訳であり、大人の学ぶ姿が子ども達に与える影響も見逃せない。こうした場の活用を含め、他の機関・団体との連携についてもチャレンジする価値は大いにあると考える。ここで生涯学習作品展についても触れておきたい。事業の性格上同じような展示が…に陥りやすい、本町ご出身の町外・県外在住の方に発表の場を提供する『里帰り特別展(仮称)』に取り組んでみてはどうか。年ごとの特色の一つとなるとともに学びを通して旧交を温めることにもつながると思うのだから…。

IV.委員の個別意見

本提言は、審議会委員の総意としてまとめたものであるが、各位の想いや願いは多岐にわたり多様でもある。そのため、まとめ切れなかった意見や指摘について本項目に個別に記載する。委員各々が真摯にこれからの公民館のあり方と向き合い、最終段階では全員がその想いを書面で事務局に寄せたこ

とを我々は誇りに思う。尚、重複する内容もあるが意のあるところをお汲み取りいただきたい。

- 「学ぶ」のテーマについては、地域に立脚した学びとする観点から『防災』と『地域の歴史』をその中核に据えてはどうか。また、「結ぶ」機能を活かして公民館が担うべきは文化活動の充実と考える、個人的には音楽活動の積極的な展開を期待したい。
- 私達の暮らしは、高齢化問題とともに人口の減少化と向き合っていかなければなりません、今まで通りが普通ではなくなるのです。こうした観点から、既存事業の共同実施(連携)や簡素化を視野に入れていく必要があると思います。
- 町内では年間を通じて様々な機関・団体等による多くの催しを実施されますが、参加者目線からは日程等相互の連絡調整がもう少し進むと喜びます。情報発信のあり方や連携した取り組みへの移行が求められているように感じています。
- 公民館と図書館を掛け算する♥ ①本町の特性を活かし、図書館(知)と公民館(活動)の有機的循環、混ざり合い(ごちゃまぜ)が求められている。図書館の情報力と公民館の実践力をつなぐことによって、学びから行動化への道筋を仕掛けたい。企業や他機関・団体等との連携は必要とは思いますが高いハードルも想定される、その点…図書館との連携は人的にも実現可能性が高いと言える。心躍る楽しい企画の創出を期待したい。②公民館の取り組みと連動して図書館の関連資料を有効活用(提供・展示等)したい。③図書館に集う住民を対象にニーズの把握に努め公民館活動に活かしてはどうか。
- 公民館と学校を掛け算する♥ 本町は、コミュニティ・スクールを基盤に学校と地域との連携が活発である、公民館活動が関わることで学校支援活動のさらなる深化が図れないか。①公民館での事業や教室での学びを学校支援につなげる仕組みはできないか。②公民館事業が学校(余裕教室等)を活用して展開ができないか。大人の学ぶ姿は子ども達のキャリア教育でもある。
- 学んだことを誰かに伝える…伝えることは社会還元への第一歩、公民館活動がめざすところでもある。こうした肩の張らない視点を大切にすること

とが公民館活動への関心を高め、活動のやりがいにつながるのではないかと。また、《やってみたい》から《やってみよう》と心動かす魅力的な学びの提供とともに学んだ後の情報発信にも力を入れたい。こうしたアフターケアを含めた流れを大切にすることが公民館で学ぶ人の拡充につながるのではないかと。

- 人口減少化の時代を見据えた新たに多様な学習機会の提供が重要だ、職員の皆さんには頑張ってください。また、利用される老若男女の多様な期待に応えるためには、まずは職員と利用者・学習者が相互に意思疎通を図り、問題や課題を共有することから始めなければならない。ともに協力し合って一つひとつ解決し乗り越えていく営みこそが、行きたくなる公民館の姿に繋がっていくのではないかと。
- 公民館活動と学校とのつながりについて提案したい。現在、公民館活動として夏季休業中等に実施されている体験講座やワークショップを、教科学習や学校行事と関連付けて実施できないだろうか。例えば、コーラスや邦楽・書道は学習発表会や文化祭での共演・共同制作、料理や華道・茶道は家庭科や美術、ダンスやヨガは体育…といった具合だ。交流しつながることのメリットは言うまでもないが、公民館事業や教室の活性化も期待される。但し、学校とは年度当初に年間調整することが肝要だ。
- 若者世代にスポットを当てた取り組みについて考えてみたい。キナルやまんてんホールが若者の集まれる場になるのであればそれは素敵なことだが、公民館の現状やそもそもそこで何ができるか知っている若者はほとんどいない。若者対象の取り組みについては一方的に企画するのではなく、若者自身が楽しい、やってみたい…と思う内容を対話やワークショップ(大学生歓迎、事例紹介等)を通じて検討していただきたい。とは言え…まずは日常的に若者世代と向き合いニーズを把握することが大切だと思う。
- 条例では天萬庁舎内に南部町公民館、キナルなんぶ内に西伯分館が設置されていると思うが、住民感覚としてはどうだろうか。複合施設が新設となった今、逆のような気もするのだが…。また、法勝寺公民館と天萬公民館のように並立館とすることも一つの案なのかも知れない。もし…そうだとするならば、それぞれ「さくら公民館」・「まんてん公民館」と名付けてはどうか。正に、新生公民館をイメージさせるのに相応しく…笑顔溢れる老若男女が集い学び合う施設の日々を共有できる名称のように思う。

V,おわりに

老若男女を取り巻く社会状況は激変しつつある、中でもデジタル化の進展は、私達の暮らしを大きく変えようとしている。何でもAIに問えばその解がスピード感をもって得られる、そんな時代が目の前に…いや既に到来しているのであり、人々の学びの環境も変容し続けていると言わざるを得ない。一方、AIに席卷される社会の危うさも指摘されているところである。デジタル社会への歩みは止められないだろうが、だからこそ…公民館活動のようなアナログ的なつながりや関わりが大切にされる社会との岐路に立っているような気がしてならない。来たるべき時代や社会の姿を展望しつつ今日の公民館の課題と向き合いたいものである。

提言内容やその方向性へ一歩踏み出すためには、様々な障壁が立ちはだかることは容易に推測できる。財源や人的配置、他団体や機関との意思疎通等問題は山積するだろうが、今やらねば…今やり始めなければ公民館に明日はない、そんな想いで一杯である。社会教育にご造詣の深い現教育長在任中に一歩前へ…、いや二歩も三歩も前へ歩みを進めていただくことを願うばかりである。そのために、本提言が貴職並びに職員の皆さんの背中を押し、少しでもお役に立てるようであれば幸いである。

結びに、私どもの任期後に言及することはおこがましいと重々承知してはいるが、一つだけお願いをしておきたい。本提言をふまえた取り組みについて、現教育振興基本計画の満了(令和11年度)と連動して、ぜひ取り組みの『評価』をしていただきたい。その際には、二宮教育長を囲んで畑岡課長、泉主幹他…、そして我々委員もみんなで報告会に参集したいものである。

南部町教育委員会

教育長 二宮 伸 司 様

令和8年3月19日

南部町公民館運絵審議会

会長 吉 持 誠

【参考】

南部町公民館運営審議会委員

吉持 誠・糸賀 真也・岡田 勝彦・神田 真紀・清川 葉月

雑賀 誠司・森田由美子・永江多輝夫